

校異源氏物語・花ちるさと

ひとしれぬ御心つからの物おもはしさはいつとなきことなめれとかくおほかたのよにつけてさへわつらはしうおほしみたることのみまされはもの心ほそく世中なへていとはしうおほしなるゝにさすかなることおほかりれいけいてるときこえしは宮たちもおはせず院かくれさせたまひてのちいよくあはれなる御ありさまをたゝこの大将殿の御心にもてかくされてすくしたまふなるへし御をとうとの三のきみうちわたりにてはかなうほめきたまひしなこりのれいの御心なれはさすかにわすれもはてたまはすわさともゝてなしたまはぬに人の御心をのみつくしはてたまふへかめるをもこのころのことなくおほしみたるゝよのあはれのくさはひには思いてたまふにはしのひかたくてさみたれのそらめつらしくはれたるくもまにわたり給なにはかりの御よそひなくうちやつして御せんなどもなくしのひてなかゝはのほとおほしするにさゝやかなるいへのこたちなとよしはめるによくなることをあつまにしらへてかきあはせにきはゝしくひきなすなり御みゝとまりてかとかかなる所なれはすこしさしいてゝみいられたまへはおほきなるかつらのきのおひかせにまつりのころおほしいてられてそこはかとなくけはひおかしきをたゝひとめみ給しやとりなりとみたまふたゝならすほとへにけるおほめかしくやとつゝましけれとすきかてにやすらひたまふおりしもほとときすなきてわたるもよをしきこえかほなれは御くるまをしかへさせてれいのこれみついい給

おちかへりえそしのはれぬほとゝきすほのかたらひしやとのかきねにしん殿とおほしきやのにしのつまに人くゝゐたりさきくもきゝしこゑなれはこわつくりけしきとりて御せうそきこゆわかやかなるけしきとしておほめくるへし

ほとゝきすことゝふこゑはそれなれとあなおほつかなさみたれのそらことさらたとるとみれはよしくうへしかきねもとていつるを人しれぬ心にはねたうもあはれにも思けりさもつゝむへきことそかしことわりにもあれはさすかりかやうのきはにつくしのこせちからうたけなりしはやとまつおほしいつかなるにつけても御心のいとまなくゝるしけなりとし月をへても猶かやうにみし

あたりなさけすくしたまはぬにしもなか／＼あまたの人のものおもひくさなり
かのほいのところはおほしやりつるもしるく人めなくしつかにておはするあり
さまをみたまふもいとあはれなりまつ女御の御かたにてむかしの御ものかたり
なときこえ給に夜ふけにけり廿日の月さしいつるほとにいと、こたかきかけと
もこくらくみえわたりてちかきたちはなのかほりなつかしくにほひて女御の御
けはひねひにたれとあくまでよいありあてにらうたけなりすくれてはなやか
なる御をほえこそなかりしかとむつましうなつかしきかたにはおほしたりし物
をなと思ひてきこえ給につけてもむかしのことかきつらねおほされてうちなき
たまふほと、きすありつるかきねのにやおなしこゑにうちなくしたひきにける
よとおほさるるほともえんなりかしいかにしりてかなとしのひやかにうちすん
し給

たち花のかをなつかしみほと、きすはなちるさとをたつねてそとふいにし
へのわすれかたきなくさめにはなをまいり侍ぬへかりけりこよなうこそまきる
ゝこともかすそふこともはへりけれおほかたのよにしたかふものなれはむかし
かたりもかきくつすへき人すくななりゆくをましてつれ／＼もまきれなくお
はさるらんとときこえたまふにいとさらなるよなれとものをいとあはれにおほし
つゝけたる御けしきのあさからぬも人の御さまからにやおほくあはれそゝひに
ける

ひとめなくあれたるやとはたちはなのはなこそそのきのつまとなりけれとは
かりのたまへるさはいへと人にはいとことなりけりとおほしくらへらるにしお
もてにはわさとなくしのひやかにうちふるまひたまひてのそき給へるもめつら
しきにそへてよにめなれぬ御さまなれはつらさもわすれぬへしなにやかやとれ
いのなつかしくかたらひたまふもおほさぬことにあらさるへしかりにもみたま
ふかきりはをしなへてのきはにはあらずさま／＼につけていふかひなしとおほ
さるゝはなけれはにやくけなくわれも人もなさけをかはしつゝすくしたまふ
なりけりそれをあいなしと思人はとにかくはるもことはりのよのさかとお
もひなしたまふありつるかきねもさやうにてありさまかはりにたるあたりなり
けり